



自分をみつめることの大切さ、修養の鐘

部長代理 勝木 茂

岩瀬キャンパスの桜もいつの間にかピンクの花びらが散り、木々の葉も一日ごとに緑鮮やかになってきました。季節は春から初夏に移ろうとしています。



新年度が始まり、1か月が経ちました。新1年生も少しずつ学校生活に慣れてきたようで、教室や校庭から元気な声が聞こえてきます。

また、他学年の子どもたちもそれぞれ1学年ずつ進級し、はりきっている様子を授業中に見ることができます。当たり前ですが、初等部の日常生活がここにあり、高学年の子どもたちは、委員会活動をはじめ、初等部のリーダーとしても活躍しています。この「はりきっている気持ち＝意欲」をいかに持続させること（日常化）ができるか、このことが教師や保護者の大切な役目です。学校生活では、日常の授業が一番重要です。子どもたちが「楽しくてためになる」と思える、そして「よく分かる」授業を日々充実させていきたいと思っています。

さて、本学には、1日3回、学園のすみずみに静かに「修養の鐘」が鳴り響きます。初等部の「学校案内」には次のように記述されています。

一分余りの敬虔なひとときの中で、起立して黙想し、1日の目標をもち反省し「心静かに自分をじっとみつめる」清らかな心を養います。

「自分をみつめること」とはどのようなことなのでしょう？「自分自身の言動などを振り返ってじっくり考えること」「これまでを顧みること」「内省すること」……。辞書などで調べてみるとその意味は実にたくさん出てきます。

「朝、家を出発する時に家族にあんな言い方をしなければよかった」「休み時間、友達と一緒に遊ぼうよと声をかければよかった」「3

時間目の国語の授業、先生の問いかけに、手を挙げれば良かった」……。

でも、自分をみつめるということは、「今日、家に帰ったらあんな言い方をしたことを家族に謝ろう」「明日は、休み時間、友達に自分から声をかけてみよう」「次の国語の時間には、勇気を出して手を挙げてみよう」……。

そしてさらに、「家族に謝ったら、あなた、よいところがあるねとほめられ嬉しくなった」「一緒に遊ぶ友達が増えると楽しくなるんだ」「自分にも手を挙げられる勇気があるんだ」というように自分を肯定的にとらえることができるようになってきます。もちろん、これらの過程においては、時として教師や保護者の適切な助言が必要になることもあります。

この「自分をみつめること」は、近年、マネジメントや人材開発において注目されている「メタ認知」という概念や人材育成の分野で、その必要性が言われている「リフレクション」に近いものがあると思います。また、これらのことが子どもの学力形成に大きく関わっているという指摘もあります。

本学には「修養の鐘」以外にも「修養日誌」があります。「修養日誌」の最初と最後の頁には、学園長先生や創業者・松本生太先生、松本尚先生のお言葉（訓）が載っています。改めて読み返していただきたく思います。

初等部の子どもたちが「自分をみつめること」の大切さをより良く自覚し、心豊かに成長できるよう教師と保護者であたたかく見守りたいものです。

